

東京バッハ合唱団 月報

[第 695 号] 2020 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 695

May 2020

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

—— 宮田光雄先生との往復書簡 ——

若き日の学究生活の思い出、ヨーロッパ思想史の旅

大村 恵美子 (主宰者)

宮田光雄先生がお訳しになった E. カッシーラー著『国家の神話』(講談社学術文庫版・2018 年刊)を、最近再読した私の感想をのせてお送りしたはがきに、先生から折返し、お手紙と大部のご著作『ヨーロッパ思想史の旅』(宮田光雄思想史論集・別巻、創文社・2008 年刊)のプレゼントが送られて来ました。個人的なやりとりではありませんが、お手紙の中には、先生のお若かった頃の思い出が含まれていて貴重なので、ご本人のご承諾と訂正をいただいた上で、月報紙上にご紹介させていただきます。

宮田 光雄 (団友)

大村 恵美子様

この度は思いがけないお葉書を頂戴し、大変恐縮いたしました。E. カッシーラー『国家の神話』(宮田光雄訳、講談社学術文庫版)を再読して下さったこと自体も感謝の至りですが、「訳文」についての御感想には、全く身に余る御言葉として承りました。

頂いたお葉書を拝読しながら、「どんなスピードで」という文字に触発されて、小生自身も、いまでは半世紀以上昔になる若い研究者だった頃の思い出が懐かしく甦って参りました。東大での大部屋の研究室で——その後、日本の学界や論壇をリードした優秀な先輩たちに囲まれて——新米徒弟として身のすくんだ、実に苦しかった生活から脱出したいという思いに促され、お叱りにも耐えて仙台からの招聘に応じたのでした。

最初の夏休み(1956年)は、高知に生まれ、旧制高校を京都で過ごし、東京に出てきた小生にとっては、本当に快適で、いわば避暑地にでもいるかのように、カッシーラーの翻訳(原本の刊行は、創文社・1960年)に集中して2か月足らず、最初の全文下訳が出来上がりました。

元来、カッシーラーは明快な文章の書き手として知られ、『国家の神話』(原書初版、1946年)は、いわば亡命ドイツ人の手による直接の英文著作だったので、極めて平明なものです。さらに翌年の夏休みには再度、初校に大幅な——ほぼ全面にわたる——訂正を加えて仕上げました。駆け出しの若い研究者には、活字出版

当時の、組版をめぐる出版社の負担や編集部の苦労など思いつくこともなく、また創立者だった太っ腹の出版社社長の寛大な配慮に気づくこともなく、今、思い出しても汗顔のいたりです。(今回の文庫版にも残っている堅い学術用語は、当時、心服していた南原先生の哲学から受けた影響の跡です。とくに時間をかけて作成した「訳註」の文章は、当時のものと全く同一です。)

その後、書齋の人間として終始した小生は、文章表現には苦しみつつ今日にいたりしました。(“岩波ジュニア新書”の編集長から連日のように電話されてきた訂正要求——二字熟語の動詞も駄目——に、しごかれたこととか、ベストセラーになった岩波新書が社会党左派系の労組の学習会テキストに使われることになり、その難解さゆえに——当時、丸山先生やトレルチに傾倒して、多量な情報を短いセンテンスにまとめることを試みた etc. ——苦情が殺到したこととか……。

この度のお葉書では、バッハ・カンタータ全テキストの個人訳を完成なさった御苦心の一端を伺い、想像だにできない大仕事に深く敬意を表する次第です。いつも小著をご精読下さるご厚志の御礼代わりに——余りにも私的すぎると思い、お送りしていない筈の小著を同封いたしました。お骨休みの折にでも、お笑い草としてご覧いただければ幸いです。

異常な時代に異常な感染病まで流行し、いよいよ(安倍一強)も馬脚をあらわしそうかと、(人間の混乱と神の攝理)(カール・バルト)——実際、人類の傲りに対する自然の反乱でもあります!——を思わされます。いっそうの御自愛と御活躍の程を念じ上げつつ。

2020年3月29日

大村 恵美子

宮田 光雄先生

たまたま思い出して先生訳の『国家の神話』(E. カッシーラー)を読み直し、そのことをお伝えしただけでしたが、それがこんなにすばらしいご本『ヨーロッパ

月報 2020 年 5 月号 CONTENTS

- ・日本語版楽譜、出版から 20 年 [下] (大村健二) …p2-4
- ・[電子書籍] 大村恵美子著『バッハの音楽的宇宙』…p4

『パ思想史の旅』をいただくことになるとは、あまりに嬉しくて、御礼の言葉もございません。いま、読み終えたところです。ま新しいご本でしたが、そのうちの何章かの初出稿は、読んだ記憶があり、特に後半は、実際になさった「旅」のご旅行記で、先生が1928年生まれ、私が1931年生まれ、ほぼ同時代に生きた関連から、私も、多くは同様に、あれこれの記念年に同地を訪れ、もしその頃すでにお顔まで覚えたあとだったら、何回もお会いしていたかもしれない、という親しさから、こまかいことまでしっかりと思い出してしまいました。

私が訪れたのは——プラハ、ブダペスト、アイスレーベン、アイゼナハ、ヴァルトブルク、ヴィッテンベルク、ミュンヘン、オーバーアンマーガウ、東・西ベルリン、ライプツィヒ、ブーヘンヴァルト、ヴェヒマル、エアフルト、ウィーン、ハイデルベルク、ケルン、ウォルムス、ニュールンベルク、スウェーデン、デンマーク、フィンランド（ノルウェーだけは寄りそこないました）、ヴァティカン、ローマ……。

そして、ルター、バッハその他多くの人々の記念行事の生き生きとしたニュースを読ませていただき、コンサートや街の様子など、次々と思い出して——私の合唱団の、これまでに5回行った海外巡行旅行（1983、1988、1993、1997、2009年の5回）には、必ず私がその1年前の同時期に下見を丹念にして、本番は10日から2週間くらい、その各地での動きなど、まるでご一緒だったかのように、ピッタリした内容でした。

今後はもう体力がないので、海外旅行は無理でしょうが、当時集まった写真などを取り出して、何度も昔回顧を楽しめることでしょう。本当にありがとうございました。

現在気になるのは、例のコロナの襲撃ですが、ただじっと自宅にこもっているとと言われても、人生が空白になるばかりです。今までどおりに週2回練習に集って、バッハを歌いつづけても、死ぬときは1回なのだから——と心ははやるのですが、やはり日本人は従順なのでしょうか、半年でも1年でもお達しが出るまで待とうよ、という意見が団員の80%だそうです。まことにうっとうしい毎日です。

ご本の御礼が、愚痴になってしまいました。おわびいたします。

2020年4月2日

— お知らせ —

東京バッハ合唱団は、新型コロナウイルスの蔓延という思いがけない事態のため、3月以来、集会練習を自粛しています。5月9日からの再開を期していますが予断を許しません。

また、全国への広がりや長期化も予想されるなか、今夏7月と8月の、都内2教会および長野県内3会場での公演予定を、すべて1年延期とさせていただきます。出演者、会場関係の皆様には、ご理解をいただけますようお願いいたします。

今月号で予定の「2021年前半の上演曲目解説」連載第2回は、機会を改めさせていただきます。ご了承ください。

●月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。

日本語版バッハ・カンタータ楽譜 出版開始から20年 [下]

- ・普及の手段として
 - ・なぜ、ブライトコプフ？
 - ・ブライトコプフとの交渉
 - ・資金のこと、営業販売のこと
- （前々号に掲載）
- （前号に掲載）
- ・版下製作、どんな作業？
 - ・訳詞上演の意義 —文明の課題として—

大村 健二（団員）

コンピューターの「Windows 95」というプログラムが発売されて、個人向け計算機（パーソナル・コンピューター）に画期が訪れました。基本システム自体もそうですが、それに対応したさまざまな処理ソフトも、スキャナーやプリンターといった周辺機器も、あつという間に性能が向上し、低価格化・小型軽量化も進みました。今までデザイナーや専門の職人さんがこなしていた、版下製作工程のほとんどが、個人の手許でできるようになったのです。2000年発刊をめざして、バッハ・カンタータの日本語訳詞つき楽譜の出版を準備し始めた1990年代の末は、まさに上のような技術革新の最中だったのです。

私が実務を担当することは、初めから当然のこととして進んでいましたので、制作を依頼した丸善プラネット社の担当者とは頻りに会って、われわれの方ではどこからどこまで、どのように進めるか、を打ち合わせました。楽譜づくりは特殊な領域で、版下製作の全工程を外部へ発注すると、それだけで莫大な経費がかかると言われ、私が全ページの版下づくりを引き受けるのに、迷う余地はありませんでした。

音符の位置と歌詞の文字の配置、原詞ドイツ語との微妙な位置取り、歌唱の実際を配慮した微細な文字間隔、ひいては歌詞の理解にいたるまで（翻訳自体への注文から、コンマ・ピリオドの有無などにも影響します）、これは歌う立場の人間でなければこなせません。先きに触れた『J.S. バッハ宗教歌曲集』（同社制作）では、複数回の校正出しに応じていただいたにもかかわらず、さすがのベテラン校正者でも、歌詞配置の微妙な修正などは最後まで直らず、失礼ながら、まったく不満足な出来栄でしたので、同じ制作会社に版下づくりは任せられないし、だいいち費用の点でも話にならなかったわけです。

美術雑誌の編集経験はありましたが、画像（楽譜を画像として扱います）の処理は未知の分野でした。建築デザイナーの友人に、処理ソフトのこと、実際の作業テクニックのことなどのイロハを教わりつつ、作業を開始しました。ブライトコプフ版ヴォーカルスコア原本から、スキャナーを使って楽譜を取りこみ、ドイツ語原詞の下に日本語訳詞書き込み用のスペース（フォントの高さ、3ミリほど）を確保するために、ソフ

ト (Adobe Photoshop) で水平の切込みを入れ、下方向へ移動のコマンドを打ち込む。これだけで、画期的な Windows 95 とは言え、当時のメモリーの限界ギリギリになって、固まった状態の数分を待たねばなりませんでした (箱のなかで必死に計算処理している気配が漂います)。エンターボタンを押してから、画面の移動が済むまで読書をしているなどとは、今の機材の環境で作業している方には、冗談としか思えないでしょう。いわゆるサクサクという実感は、ようやく 2000 年代も末になってからのものだったように記憶しています。

4 声部合唱で 3 段組みなどの場合、合計で高さ 36 ミリ分 (3×4×3) のスペースが必要になりますが、オリジナル原本のサイズ (タテ) が 270 ミリで、われわれの出版譜サイズ 297 ミリ (A4 判) との差が 27 ミリしかないときに、36 ミリ分の確保は至難です。原詞ドイツ語の「p」とか「g」とか「r」とか、下に足を伸ばしているフォントがあると、その足を迂回して切込みを入れなければなりません。

曲によっては、英語歌詞が並記されているものがあり、これを切り取れば、そのまま日本語歌詞のスペースになりますので、好都合ではあります。ただ、畏れ多くも、かのチャールズ・サンフォード・テリー先生らの名訳を削ってしまうことに、若干のうしろめたさを覚えました。この場合、スペース確保の手間は省けますが、音符の方に課題が残ります。英語歌詞のシラブルがドイツ語原詞と合わない箇所など、原本では補助音符を加えて対応してありますので、英訳が消え、その加工音符だけが残って意味不明、または日本語歌唱の妨げになります。その英訳用補助音符の消去には手間がかかりました (消去しきれなかった楽譜もあります)。

……このくらいにしておきましょう。

* * *

前回の連載で、「わが国の精神文化のうすっぺらさのお蔭で、ブライトコプフの怖れは杞憂に終わった」(月報 No. 694、4 月号、p2) と書きました。どうということかいうと、われわれの日本語版楽譜を使ってみようという方がめったに現れない、したがってほとんど売れない、ということです。

商品の人気のなさを日本の文化の所為にしように思っている訳ではありません。現に、声楽家の佐々木まり子先生 (団友) が、盛岡市の市民クリスマスで、毎年のように、われわれの楽譜を使ってカンタータを演奏してくださっていることは、月報でも紹介しました。山形市のお医者さん、山本弘史氏 (後援会員) も、ご自身の主催するコンサートでの上演用に何度も取り寄せてくださっています (これがご縁で、当団の公演にもときどき、バス団員として参加されます)。1 冊ずつの注文であれば、北海道から沖縄まで、多くの方が購入してくださっていますが、今のところ、コーラス使用の数十冊単位というのは数えるほどです。



■左: 底本の表紙ロゴマーク。創業年の「1719」がデザインされている。前時代の雰囲気は面白くて使わせてもらった。現在の社章ロゴはざっとシンプルであか抜けている。

■上: 創業 300 年を告げるブライトコプフ社の電子メールのレターヘッド。First in music (世界初の楽譜出版) の書き込みも誇らし気。

ドイツ語 (原語) 演奏にも使えますよ。しかも訳を見ながら歌えます。そう言って、知り合いのやっている合唱団にも進めるのですが、なかなか採用には至りません。つまり、ブライトコプフ社が恐れていた、本家のヴォーカルスコアとわれわれの出版譜とが競合することは (残念ながら!)、毛ほども起きなかった、ということです。その要因は、いくらでも思いつきます。

①実績に天地 (以上) の差がある。本家は、昨年が創業 300 年。われわれの楽譜の表紙にも使わせてもらっているロゴマークを見てください (上図)。創業の 1719 の年号がデザインされています。バッハがライプツィヒに赴任する 1723 年の直前で、その後の付き合いは、作曲家の後半生に決定的な役割を果たしています。比較するのもおこがましいですが……。

②われわれの仕事が知られていない。圧倒的な PR 不足です。

③ブライトコプフ版であること。

「桶の理論」をご存知でしょうか。むかし教科書に木製の桶の絵が載っていました。何枚かの、背丈の違う板が丸くタガで束ねられていて、それぞれの板には肥料 3 要素 (?) だったかの名前がついています。言いたいのは、いちばん低い板の丈以上には水を蓄えることができないように、一つの要素がどんなに突出してもダメですよ、ということだったようです。

クラシック音楽ファンの中には、〇〇は××年の△△版 (エディション) に限る、というような熱烈な方もいて、私はそういう方が苦手です。上演された曲の卓越した魅力のうちの、どれほどが、その「版」の功績に拠るのかを強調する前に、どの版であれ、またたとえアマチュアの演奏であっても、至高の音楽となつて響く、その曲自体に打たれることにこそ、(演奏であれ、鑑賞であれ) 音楽することの本質があるのではないのでしょうか。

つまり、バッハ・カンタータの場合、新バッハ全集による校訂作業の結果、ブライトコプフ版ヴォーカル譜での、ある楽章全体が違う曲に替わったとか、最終コーラルの節が別の節に入れ替わったとか、コーラル自体が別の曲に差し替えられた、といったケースがいくつああって、これは重大な変化です。それでも、多くは手当てができます。ましてや、何楽章の何小節目の「ソ」は「ソ#」の間違いだった、というようなケースの場合、これって大問題でしょうか (大問題です

が、これも手当てが可能です)。ですから、どうぞ、われわれの楽譜（ブライトコプフ版に拠る）を採用してください。先に述べたように（月報 No. 694、4月号）、新全集での校訂は、極力反映するよう努めています。

④ そもそも、バッハ・カンタータにたどり着く絶対数が少ない。これは、承知の上です。わが国でキリスト教文化に親しみをもつ層は、いつでも少数者ですし、そのなかの合唱ファン、そのなかのバッハ愛好家、そのなかの教会カンタータ理解者……、と絞ってゆくとたぶん数百人になってしまいそうです。それでも、近年はバッハ・カンタータの演奏団体が、国内の大きな都市の数に近いほど存在して、それぞれに高度な公演を続けています（もちろん、原語演奏）。とすると、残る、われわれの楽譜の不人気の要因は？

⑤ 日本語歌詞が付いていること？

「50 曲選」 完結後は、公演計画に沿って新規に訳詞楽譜の必要なものをそのつど制作出版し、それを団員とソリスト、練習伴奏者にもっていただいて練習をかさね、本番に臨んでいます。こうして、50 曲の後に 31 曲が、新規で既刊リストに加わりました（全 81 曲のリストは前々回・月報 No. 693 に掲載）。

この時点では、すでに制作会社を間にいれず、われわれが探し出した数件の印刷会社に見積もりを出してもらって、一番安い業者を直接、指定しています。刷り部数も、「50 曲選」以降は方針を改めて（第 1 回配本 10 曲の〈なんと〉各 1000 部〈!〉から毎回減らし、最終の第 5 回配本の年には各 300 部。これら初期の在

庫がわが家＝事務局を占拠している)、その後は、われわれが 1 回の公演で使う部数と複数の取り次ぎ店に配本する分の、ぎりぎり合計 100 部と決めました。今では、版下が保存されていて、大部の注文があっても 1 週間ほどで納品できるような態勢になっています。

それにしても、なぜ、こうも人気がないのか。「50 曲選」 発刊のころ、関西のある音大の生協書籍部にセールスに行きましたが、担当者に評判をきくと「日本語がついているから、いやだ」という反応が多い、と言われました。浅いな、と思いました。底本には、ほとんど英訳歌詞もついていますし、曲によってはさらにフランス語訳詞まで組まれているものがあります。これは邪魔にならないのでしょうか。日本語だと意味が分かるから目障り、ということなのでしょう。

「外国語で歌う／聴く」とこと、「母語で歌う／聴く」とことの違いは、もっと大きな文明上の問題として意識されて良いと思います（ルターの改革にも通底）。何度か触れたように、われわれの楽譜でのドイツ語・日本語並記を許諾させたのが、「われわれは、バッハのことばと異なることばをつかう国の享受者として、訳詞（母語）で歌い、かつ原詞で歌い、意味と音楽の流れの両方を味わいたい。ドイツ人が味わってきたように」という訴えであったわけでした。たぶん「ドイツ人が味わってきたように……」が、ブライトコプフの版權担当者の心に響いたからに違いない、と思っています。

路線は正しいはずですので、この道を先へ進みます。あと 100 年もすれば、たどり着くでしょうか。 <了>



1994年に刊行された書籍版（丸善ライブラリー）を一部改訂し、電子書籍化したものです。

丸善出版(株)電子コンテンツ開発室
Tel 03-3512-3258 Fax 03-3512-3270

バッハの音楽的宇宙

数百年残されているバッハの作品の中には、確固とした一つの宇宙が存在する。それは古今東西を通じて人間の心の奥底に訴える普遍的な魅力に溢れるものであり、これを何とかして簡潔な形に言葉として抽出してみたいという気持ちに誘われる。

本書では、バッハがカンタータでとり上げた、人間が遭遇する広大な領域の森羅万象の題材を、あえて宗教的・歴史的背景からぬき出すようにして紹介した。そうすることで、誠実に生きたバッハが、三百年後の世界に生きる私たちに生身の声で直接語りかけてくるように思われるのである。（書籍版カバー折り返し、より）

目次

1 歴史

世界・自然／社会・経済・貧富・階層／挫折と勇気

①《神の時こそいとよき時》（カンタータ 106）

②《天の王よ、汝を迎えまつらん》（カンタータ 182）

③《考えみよ、われを襲いしこの痛みに》（カンタータ 46）

（……以下各章にわたって、カンタータを中心に代表作全 71 曲を解説）

2 生活

安定-保守／動-変化-革新

3 国家・政治

王権と民権・戦争と平和／都市と農村・家庭

4 宗教

道徳／心と身体／生と死／人間と神／個と普遍

・ J. S. バッハ年表

・ 曲名対照表

・ 電子書籍版発行にあたり

■ 発行/発売：丸善出版

■ 価格：1,000 円＋税

■ お求め先：

・ 丸善雄松堂(株) Knowledge Worker(ebooks) — <https://kw.maruzen.co.jp/>

・ 大学生協 Varsitywave eBooks — <https://coop-ebook.jp/>